
論説

ナショナル・シアター・ライブから3篇

狩 野 良 規

はじめに

ナショナル・シアター・ライブ・イン・ジャパンは、2014年2月の『フランケンシュタイン』でスタートを切り、2023年いっぱいめでたく満10周年を迎える。よく続いた！ コロナ禍もあったし。また、イギリス人は喜ぶだろうが、日本人には決して見やすい作品ではないという舞台も多々あった。

そんな“ジャスト・ブリティッシュ”な演劇を10年間で計62本、日本の映画館で上映してくれた。僕は5周年の折に、「ナショナル・シアター・ライブから5篇」(『Aoyama Journal of International Studies』(青山学院大学国際研究センター) No.6 (2019年2月) 所収)と題して、自分が秀作だと思った芝居5本の解題を書いた。

今回はその続篇として、2019年以降の上映作品から3篇を選んでご紹介したい。いずれもイギリス風味ないしは毒がたっぷりの舞台。ご笑覧のほど。

1. ^{だま}騙されちゃいけない、猛毒あり——『アレルヤ!』

まずは、アラン・ベネット作の『アレルヤ!』(2018年)から。演出はニコラス・ハイトナー。二人は相性がよく、これが10作目のコラボとか。大ヒット作『ヒストリーボーイズ』も彼らの作品である。

芝居小屋はハイトナーが創設したブリッジ・シアター、『ジュリアス・シーザー』と『夏の夜の夢』では体育館さながらのアリーナだったが、可動式のこの劇場、今回はもっとおとなしいスラスト・ステージである。そこで老人たちが歌ったり踊ったりもするのだ

が……

開幕は、車椅子の老女がひとり出てきて語り、歌う。ついで若き経営コンサルタントのコリンが自転車に乗って登場する。故郷に帰ってきた、父親は閉鎖寸前の病院に入っている、と。さらに年寄りの患者たちがぞろぞろと現れて、彼らも歌う。白人、黒人、東洋系、男女、背の高さもまちまち、へへエ、みごとにバラバラ、不ぞろい。客席から笑いが起こる。

舞台はイングランド北部のヨークシャーにある国民保健サービス（National Health Service, NHS）の運営するベツレヘム病院、愛称“ベス”の高齢者病棟である。NHSは第二次大戦後に誕生した福祉国家イギリスの“目玉”政策、全国民が無料で医療サービスを受けられる制度だが、サッチャー政権（在1979-90年）以来の緊縮財政・民営化政策によって、その基盤がなし崩しにされてきた¹⁾。

ベスは「ゆりかごから墓場まで」の理念に沿って、地域の人々の健康を守るべく努力してきたが、しかしこの昔ながらの地方病院もご多分に漏れず、今は合理化・効率化の波に洗われ、存続の危機に瀕している。

理事長曰く、ここは常に空きのベッドを確保し、地域の高齢者のケアをし、利益も出ている。だがコリンは、だったら今のうちに民営化すべきだ、と。医者はインド人のヴァレンティン。おっと、イギリスで褐色の肌の医師や看護師は少なくない²⁾。

ドキュメンタリーのクルーが取材に来る。^{らつわん}辣腕の看護師長シスター・ギルクリスト（デボラ・フィンドレイ）がコリンに言う——病院は介護施設ではないはず、患者を回復さ

1) 思い出すのはロンドンオリンピック（2012年）の開会式。ジェームズ・ボンドがエリザベス女王をエスコートする映像はいかにもわかりやすい“イギリス”だったが、その後に、NHSの医師や看護師たちがベッド上の子供たちとともに会場狭しと踊りまわる一幕。戦後の労働党政権は医療だけでなく、鉄道・公共インフラ・鉱山など、経済の基幹をなす産業を次々と国営化した。四半世紀を経て国家経済が立ち行かなくなり、“鉄の女”サッチャーが登場、労働組合と戦い、民営化を進め、福祉国家の解体をめざした。NHSは“新自由主義”に席卷されたイギリスの社会福祉制度の最後の砦、そんな思いが開会式のパフォーマンスに見てとれた。

なお、イギリス戦後史を社会主義の立場からにわか勉強したい向きには、ケン・ローチのドキュメンタリー映画『1945年の精神』（2013年）をお勧めする。戦前の労働者階級がいかに金がないで病院に行けなかったか、ベヴァリッジ報告に始まる福祉国家政策の理想、国営化の様相、サッチャーによる資本主義体制への回帰、そして資本主義もまたどん詰まりになっている21世紀に、もう一度“The Spirit of '45”を振り返ってみる必要もあるのではと痛感させられる。

2) 19世紀に7つの海を支配した旧大英帝国の^{おおだな}大店感覚は戦後も続き、1970年代末まで英連邦からの移民を無条件で受け入れてきた。また、イギリスは医学部だからといって、授業料が高いわけではない。そこで旧植民地の若者たちの中にはかつての宗主国で医学を学び、卒業後はイギリスに残るなり、母国に帰るなりして、医療に従事する者が現在に至るまで少なくない。

せ、退院させて、上手に回転させたい、でも老人たちの半数はここを出たら行き場がない、「見えない列があるのに、ベッドが空かない」。現場の本音であろう。

一方のコリンは、炭坑夫の息子、労働者階級の出身である。若いころ政府に炭坑を閉鎖され、故郷を飛び出して敵側に回り、今はロンドンで保険省の大臣に助言する立場となった。肺を患い入院中の父親ジョーが優秀な息子に、「母さんのために歌え」と言う場面がある。コリンは嫌々、でも上手に、心に染みる歌を披露する。この親子、いろいろな葛藤があっただろうことが窺える。

コリンに扮するは、サミュエル・バーネット。『ヒストリーボーイズ』で、ゲイのユダヤ人ボズナーを演じた。あの時もきれいな声で同級生デンキンを想う歌を歌っていた。そうね、コリンもそっち系のような。ヘッヘッヘッ、ベネットはバイ、ハイトナーはゲイ、二人は毎度、作品に同性愛の香りを漂わせて、臆することがない³⁾。

また、高齢の患者たちも明るく歌い、けっこう動きよくダンスを踊る。ハイトナーは“80代による『ヒストリーボーイズ』⁴⁾”と。

壁がスライド式で、素早く場面を転換させる。小さなエピソードを積み重ねる芝居を支える美術は、ベネットの舞台ではおなじみのボブ・クロウリーである。

けれども、老人たちによる青春ミュージカル(?)もあまり見せられると、さすがにパンチ不足で飽きてくる——と思っていたら、ギルクリストが電話をかけて、「死人が出そうよ」。そして、患者のミセス・モーズリーに注射を打つ。それを隣のベッドの患者が取材クルーから預かったハンディカメラで密かに撮影している。ほんわかムードにスッと冷水を浴びせて、前半が終了する。

後半も、老人たちの踊りから。ギルクリストも加わる。観客から拍手。と、ミセス・モーズリーの娘夫婦が理事長に詰め寄る、「あと3カ月したら、相続した家が非課税になったのに。損害賠償を求める」。対して理事長は、年寄りが死んで怒る人は少ない、むしろほっとする人の方が多い、それから病理解剖は高いですよ、と。

3) ベネット & ハイトナーによる映画『ミス・シェパードをお手本に』(*The Lady in the Van*, 2015年)は、ベネット家の駐車スペースに長年廃車を置いて住み着いてしまった実在のホームレスの老女をモデルにした物語。マギー・スミスがすごい婆さん顔と傍若無人な振舞いで笑わせてくれるのだが、その老人の孤独な心情を描く映画でも、終幕近くに同性愛の香りがチラリ。また、『ヒストリーボーイズ』で生徒たちを演じたハイトナーの秘蔵っ子たちが、チョイ役で密かに出演し、どこに誰が潜んでいるか探すのもお楽しみになっている。

4) NT ライブ『アレヤ!』劇場公開時パンフレット(アジョンス・ドゥ・原生林、2019年)所収の、村上祥子「医師は走り、患者は踊る——憂国の劇作家が見つめる医療制度の行く末」より。でも、演出家の発言に騙されてはいけない。

また理事長がヴァレンティン医師に、患者から君に触られると苦情が出ていると語るシーンでは、「不可触民でもないのに」というセリフに、客席が大きく反応する。NTライブの楽しみのひとつ、イギリスの観客たちのリアクションがわかる。でも、日本の映画館はシ～ンとしていた。僕だけかな、ケタケタ笑いながら見ていたのは。

若い介護士がジョーと悶着になり、彼がお漏らししたと報告する。ギルクリストが「ベッドが空きそう」。ほほう、怖い話になってきたぞ。ジョーが息子に電話をかける。コリンは保険大臣と一緒に気の進まないオペラの観劇中だ。彼女のリストに載った、「グッバイ、コリン」。なるほど看護師長のリストを患者たちは知っているんだ。あな、恐ろしや。

ギルクリストがジョーにミルクを持ってくる。毒が入っているのか。ジョーが彼女とダンスを踊る、別れのワルツ、神の御恵みを。痛烈なアイロニーである。

ギルクリストの生い立ちが語られる。母親は未亡人、一人っ子、介護の仕事に就き、その後母親の介護をした。看護師は天職ではない、なりゆきで選んだ。しかし、勲章を授与される。患者たちがお祝いの合唱をする。

理事長がパソコンで動画を見せられる。ギルクリストが注射を打つ映像である。

被告席のギルクリスト——裸舞台の中央の椅子に一人座る。患者の死は皆が喜んでいて、ほとんど面会に来ない最愛の人までもが、誰かがやらねば、私はプロ、私は社会の役に立っている、彼らの死を助けた……終身刑の判決が下る。

ヴァレンティンは、知らなかった、この国にどうい^{ふう}な風に貢献しているのか、インドでは年寄り自分の家で世話をすると。「希望と栄光の国」——エルガーの「威風堂々」第1番に歌詞をつけたイギリスの愛国歌——を歌わされるが、途中で歌えなくなる。

スクリーンにニュースが流れる。看護師長が83人を殺害していた、思い込みと使命感の大きさ……なるほど、いつも空きベッドがあるように、クールで潔癖なギルクリストは究極の効率化を図っていたわけだ。おゝ、ブラック⁵⁾！

ベスは閉鎖となり、理事長が経営する不動産屋に売却され、ホテルになる。彼には博士号が授与されるとか。ヴァレンティンが看護師長に面会に訪れる。彼女は、日陰に咲く花が好きだ、私は手っ取り早い方法を取っただけ、と。ヴァレンティンの強制送還が決まる。

『ヒストリーボーイズ』でイスラム教徒のアクタルに扮していたサッシャ・ダーワンが演じるヴァレンティンが語る——ギルクリストには居場所がある、でも僕にはない、

5) 日本では2016年7月、神奈川県の障害者施設で類似した事件が起こっている。『アレレヤ!』の内容も描き方も、諷刺喜劇の伝統を持たぬ日本ではご法度といえよう。

この国には教育がある、手遅れになる前に寛容になれ。それをインド人に言わせる皮肉⁶⁾！

そう、ハリウッド映画は正義の成就を謳^{うた}う、だがイギリスの作品は正義の成就していない自国の現実を問う。日本人は「不謹慎」と一蹴するかもしれないが、これはイギリスの深刻な現状とそこに生きる人々の真情を、クールに、頭でっかちにならずに、深い憤りを込めて綴った英国流の正義の物語である。ジャスト・ブリティッシュ！

2. アメリカの夢の果て——『リーマン・トリロジー』

『リーマン・トリロジー』（ピカデリー劇場、2019年）は、銀座に近い京橋の試写室で見せてもらった。2回の休憩を挟んで、いやあ、夢のような、至福の3時間30分であった。このまま終わらないでほしい、と。東京での上映は2020年2月から。コロナ禍が猛威を振るいはじめて、そろそろ映画館へ行くのがはばかられた時期に、異例の大ヒットとなった。

ドイツからアメリカへ貧しいリーマン家の三兄弟が渡ってきた19世紀半ばから、2008年のリーマン・ブラザーズの倒産までを一気に描き、そこに「アメリカの夢」を実現しようとする同国の150年の歴史を重ねる。演出サム・メンデス。役者は男優3人のみ、彼らがずっと同じ衣裳で声と仕草だけを変えながら、70以上の役柄を演じ分ける。これぞ演劇！

第1部「3人の兄弟」。ピアノの生演奏、背景にニューヨークの夜景、モノクロのパノラマ。リーマン・ブラザーズ破綻のニュースが流れる。黒いフロックコートを着たサイモン・ラッセル・ビールが登場し、「アメリカを夢見てきた」と語りはじめる。映像が海に変わる。ユダヤ人の息子が南ドイツのバイエルンからニューヨークの港についた。自由の女神がシルエットで映る。ビールの長い説明ゼリフ、だがそのまろやかで詩的な語りに、早くもうっとりしてしまう。彼の声とエロキューション。この芝居、ひたすら役者たちがしゃべる。

6) 『ヒストリーボーイズ』のアクタルは、終幕でブラッドフォード（Bradford）近隣のキースリー（Keighley）で学校の校長になったと語られる。イングランド北部のブラッドフォードは、パキスタン系の住民が多いことで知られる。なるほど、ドンビシャ。そして『アレルヤ！』のラストでは、ヴァレンタインに作者のメッセージが託される。シェイクスピア劇あたりで強引に白人の役を肌の色の異なる役者に割り振るのではない。移民系の俳優に、その出自を反映した、地味だけどリアルで痛切な心情を吐露させて、いい味を引き出している。

移民船で大西洋を渡る45日間の旅で、酒と賭けごとを覚えた。入国審査官に名前を聞かれる。ハイアム・リーマン。ハイアム？ ヘンリーだな。入国許可のハンコを押してくれる。時に1844年9月11日。^{オルゴール}音楽箱みたいな魔法の国。ピアノの演奏とともに、透明のガラスケースのようなセットが回る。

ヘンリーは南部アラバマ州のモンゴメリーに小さな衣料品店を開く。綿花の町、^{プランテーション}大農園で奴隷たちが働く。ガラスのドアに「H. リーマン」と書く。いつかこれを大きな看板^{サイン}にしてみせる。あと3年で借金が返せる、それまでの辛抱だ。

弟のエマニュエル（ベン・マイルズ）とマイヤー（アダム・ゴドリー）が兄を追いかけてきた。この2人も黒服。エマニュエルは早熟で喧嘩っ早く、ヘンリーとは性格も意見も異なる。その調停役は、まだ20歳にならない末っ子のマイヤーだった。3人は1850年、店名を「リーマン・ブラザーズ」と改名する。

農園で大火が起こり、綿花が全滅する。兄弟は復興資金を提供し、その資金で収穫された綿花を手に入れ、北部の紡績工場に売って、大きな利益を得た。彼らは綿花の卸売り業者となり、店名に「コットン」を加える。ガラスケースの舞台が回る。舞台はワンセット、転換は速い、速い。

ヘンリーが黄熱病で他界、弟たちはユダヤ教の慣習に従って7日間喪に服す。マイヤーが祭りの日、19歳のバベットを見初める。ビールはヘンリー亡き後、娘の父親、さらにバベットにも扮する。黒のフロックコートはそのまま、声色だけで別人となる。

兄弟は24カ所の農園と綿花の取引を行なうまでになる。エマニュエルはニューヨークに事務所を開設、また商談相手のユダヤ人の娘、ゴドリー演じるポーリーン・ソンドハイムを3カ月間、24回訪問して口説き落とし、結婚に至る。

しかし、南北戦争（1861-65年）が勃発、アラバマは独立する勢いだったが、長期化した内戦で75万人が命を落とし、南部は敗北、農園は消失し、奴隷もいなくなる。奇跡的に生き残ったリーマン・ブラザーズは、戦後復興のための^{バンキング}投資銀行を立ち上げる。

綿花はすでに過去のものとなった。エマニュエルは、コーヒーを世界中に売りさばき、弟をなかば強引にニューヨークへ呼び寄せる。

第2部「父と息子」。リーマンはユダヤの一族。第1部には聖典タルムードの教えの挿話が出てきたが、第2部の冒頭は昔聞いたラビの話。人間の一生は、18歳で結婚相手を、20歳で天職を見つけ……100歳で浮世のごたごたから解放される。よくある話だ。会社の看板^{サイン}から「コットン」が消え、「リーマン・ブラザーズ^{バンキング}投資銀行」と社名が変わる。

ニューヨークに証券取引所ができる。ウォール街ですべての取引が行なわれ、けれどもそこに売買される物はない。ことばだけのやりとり。エマニュエルの息子フィリップ

は、ドイツもアラバマも知らない。ニューヨーク生まれ、ことばが巧みだ。メガネをかけたビールが、若くて細い声で、よくしゃべる。フィリップは株の時代の申し子だ。

証券取引所のすぐ前で、毎日綱渡りをする男がいる。ロープを張り、空中を器用に歩く。ビールがそれをマイムで見せる。セリフだけではない、小太りの彼は、しかし体の動きも抜群だ。命がけの綱渡りが、株の売買と共鳴する。スリルと快楽を味わえる、保証のない世界。

エマニュエルは、子供のころ弟とやったコイン積みの遊びの夢を毎晩見るようになる。だんだん高くなるコインの塔に登りはじめる。ベン・マイルズが舞台の柱にしがみつく。海の映像が、激しく動く雲に、おっ、それが赤く染まり、機関車が彼の方へ走ってくる。

時は開拓線が西進し、大陸横断をめざす鉄道が求められる時代となった⁷⁾。鉄道を見たことがないエマニュエルは躊躇するが、第二世代のフィリップは鉄道会社と交渉し、高額の投資を行なう。綿花から始まったリーマン・ブラザーズの投資は、コーヒー、鉄道、石油、タバコ、さらにパナマ運河の建設へ……フィリップはいつも勝ち札を当てた。

アメリカの資本主義が大きく成長した時期、かの国の夢も時とともに激変した。

だが面白いのは、フィリップの嫁選びである。8人の候補を、20項目、各5点満点のポイント制で評価するが、選んだのは完璧な女ではなく、85点の女性であった。ビジネス精神は万能にあらず。

リーマン家のもうひとりの第二世代、マイヤーの末息子ハーバート——ベン・マイルズ——は9歳になった。優秀にして弁が立つ。よぼよぼの老ラビ——サイモン・ラッセル・ピール——の教えに堂々と反対意見を述べる。

世代交代は進む。老いたエマニュエルとマイヤーは出社しても、経営者なんだから「書類に署名するだけでいい」と言われる。フィリップは宣う、金^{のたま}は物を買うためにではなく、金を増やすために使うんだ。ほほう、僕の人生観、世界観ではついて行けない話になってきた。

マイヤー逝去。7日間の喪が3日に縮められる。ハーバートはリーマン・ブラザーズから離れ、政治家となり、後にニューヨーク州知事となる。ひとつ空いた取締役会の席に座ったのは、フィリップの息子ロバート（ボビー）、子供のころは絵と馬が好きだった、

7) 小田島創志が、“縦と横”で戯曲の構造を解説している。南部の農園と北部の紡績工場をつなぐ仲介業で財をなし、しかし南北戦争後は、東部から西部へと大陸を横断する鉄道事業に投資する。また、第一世代と第二世代、さらに第三世代へと縦のユダヤの伝統が貫き、だが同世代のアメリカ人同士の横のつながりと交錯する、と（NTライブ『リーマン・トリロジー』劇場公開時パンフレット（アジョンス・ドウ・原生林、2020年）所収の、小田島創志『『リーマン・トリロジー』のダイナミクスと言葉』より）。小田島家の若き三代目、上手に説明するなあ。

20歳になる青年であった。それがまた無邪気だった少年期とは変わり、サングラスをかけ、さながらマフィアの風^{ふう}。家族経営の銀行はもう古い、これからは工業ではなく、ラジオや映画や舞台などに投資すべきだ、と。フィリップは自分の老いを実感する。

けれども、アメリカは第一次世界大戦に勝利し、世界の中心となり、好景気に沸き返る。誰もが株で儲けようとする。フィリップは「リーマン・コーポレーション」を設立し、投資業務を分社化した。彼は50年間失敗していない。だが、もうスピードを落とす時期だ。しかし彼には周囲の声が聞こえない。舞台の背景が暗くなる——1929年10月、ウォール街の株価が大暴落した。

第3部「不滅の存在」。ラジオの雑音がひどくなり、幼児が泣いている。そんなノイズも役者が発しているおかしさ。暗黒の木曜日(1929年10月24日)、この日からニューヨーク株式市場の大混乱が始まり、やがて大恐慌が世界各国を襲う。ピストルの音。次々と自殺者が出る。アメリカが夢から覚めた、アメリカは走れなくなる。金は幻影^{ゴースト}となる。

そのころ、ボビーは競馬場でバツイチのルースに言い寄られ、婚約する。彼女に扮するビール、ここも声色と仕草だけで女に見せてしまう。どっしりとしたヘンリー、多弁なフィリップ、綱渡り師、老いぼれのラビ、そしてこの蓮っ葉な離婚女など。ベン・マイルズもエマニュエル、第二世代のハーバート、後の共同経営者やトレーダーたち。また、アダム・ゴドリーはマイヤー、ボビー、さまざまな花嫁候補、何人もの生徒たちなど。

おっさん3人が、19世紀の古風なフロックコートのまま、自在に別人を演じる。役者冥利だろうなあ。それを成立させているのは、彼らの語り。人物たちのこと、社会の状況、歴史の流れなどを、簡潔に軽やかに説明する。元々はイタリアのラジオ劇だとか⁸⁾。なるほど。映画だと全部見せようとする。だが、演劇はやっぱり、ことば、ことば、ことばだ。その方が観客の想像力を掻き立てる。

さらにサム・メンデスは、「第4の登場人物⁹⁾」としてピアノの生演奏を導入した。この芝居には人間らしさと簡潔さが必要だと言って。そう、正面切って資本主義の変遷史を描くなら音楽はむしろ不要だ。しかし、ピアノ(のみの)音楽は、故国への郷愁、上

8) ステファノ・マッシーニが2012年にラジオ劇として執筆。その後、彼自身が舞台劇に改作して、パリで初演(13年)、さらに15年にはミラノのピッコロ座が上演した。イギリスではベン・パワーが翻案、NTリトルトンで18年に初演したのが今回の舞台である。

9) NTライブ『リーマン・トリロジー』の幕間の、サム・メンデス、ニック・パウエル(作曲・音響デザイン)、キャンディダ・カルディコット(ピアノ演奏)へのインタビューより。ピアノの生演奏は、稽古初日にサム・メンデスが提案したという。

昇期の軽快な気分、どん底の沈滞感などをシンプルに表現して見事。抑え気味に、うるさくなく、ちょいと情緒を添える。役者たちの語りの伴奏をし、でも時に3人とは異なる視点からコメントする。さりげなく、遊び心をもって、ヴォードヴィルの気分で¹⁰⁾。

フィリップは、人生で初めて日記に何を書いていいかわからなくなる。ボビーはどうしたら世界を救うノアの方舟を作れるのかと思案する。新聞には毎日、ハーバートがルーズベルトと一緒に国を救うと主張している記事が載る。

リーマン・ブラザーズは同族経営をやめ、共同経営者を得て、なんとか生き延びる。ボビーは真珠湾攻撃の新聞記事を読んで軍需産業に目を向け、原爆投下の報に原子力時代への投資を行なう。ボビーは新しいことば“信頼”^{トラスト}の意味を考える。

この物語、たびたび信頼が語られる。マイヤーは嫁取りの折、バベットの父親に「信頼^{トラスト・ミー}してくれ」、南北戦争後にも同じ一言でアラバマ州知事の心を動かした。しかし、証券取引所ではことばだけの危うい信用取引が繰り返され、戦後はことばとは裏腹に信頼関係の希薄な世界へと変貌していく。

1947年にフィリップが他界する。だが、戦後復興は戦争以上に儲かる、休業は不可能だ。3分間の黙祷だけで弔意を示す。

これからは消費者の購買意欲を高めて、我々是不滅の存在になるんだ。リーマン・ブラザーズは国境と言語を越えて世界中に投資するが、同時にボビーは毎晩、父や祖父と同じ夢を見る。高い塔が崩れる悪夢を。それでもコンピュータ開発に魅せられ、投機部門を作り……ピアノの音がしなくなる、殺伐としてきた。株式市場が踊り、3人のおっさんたちもツイストを踊る。3時間半の長い芝居の終幕近くになって、まだ踊る体力がある、すごい！

ボビーはもう止まれない。彼は踊りつづけて、自分が墓に入っていることに気づかない。1969年、リーマン家の最後の経営者が世を去る。だが、喪に服することもなく、会社は続いた……一族が退場してからは、ちょいと駆け足になる。致し方ないか。

リーマン家をめぐる3部作。まずは3人の俳優が絶品だ。またピアノ演奏のみの音楽も秀逸。それからガラス箱のセットも、背景の映像も効果的。で、さて、演出はいずこに——と思わせてしまうのが、サム・メンデスの真骨頂である。演出が前面に出ず、しかし演出なくして、この上演は不可能である。最小限の数の役者、衣裳も変わらず、楽器もひとつだけ、長時間の芝居をワンセットでもたせてしまう。シンプルにして、作りこみ過ぎず、薄味で、しかしやっぱり資本主義のチャンピオンたるアメリカの150年の歴史である。内容はたっぷりしている。

10) ここいらへん、同インタビューを参照した。

夢見心地の舞台、だが甘口にあらず、見終わると我々が生きている現代資本主義社会の危うさとグロテスクさをつくづくと考えさせられる。

3. 移民たちとの^{かいこう}邂逅——『スモール・アイランド』

こういう作品を上演させるために、ナショナル・シアターはルーファス・ノリスを芸術監督に指名したのであろう。シェイクスピア劇よりは、移民とかエスニック・グループとかに焦点を当てた芝居が、彼の持ち味といえよう。

『スモール・アイランド』（NT オリヴィエ劇場、2019年）は、ジャマイカ系移民二世のアンドレア・レヴィが彼女の両親たちの世代を綴った同名小説（2004年）を舞台化した作品である。マイケル・ビリントンはその劇評を「ナショナル・シアターの歴史上、一画期をなす」と書きはじめ、芸術的にもっといい芝居はあるが、ジャマイカ人が、何を希求しながら移民したかを描いて、最も重要な作品のひとつであると結び、5点満点をつけた¹¹⁾。演劇の芸術性よりも公共性を考慮した採点だ。なるほど。

円形舞台の後方のスクリーンに、ジャマイカの白黒の実写映像が投影される。俳優たちが登場し、ホーテンス（リア・ハーヴェイ）が歌う。黒人の娘は熱帯雨林におおわれた村の学校で、白人の若い伝道師、アメリカ人の女教師の助手を務めている。

ホーテンスが子供時代を回想する。彼女は裕福な家庭に預けられ、そこでいとこのマイケルと一緒に育った。彼は寄宿学校に入り、少し頭でっかちになって帰り、敬虔なキリスト教徒の父親に反発する。やがて第二次大戦が勃発、マイケルは空軍に入隊すべく、イギリスへ向かう。本当の世界は外にあると言って。

お話はカリブ海の小さな島国から、もうひとつの小さな島の首都ロンドンへ、黒人の世界から白人の社会へ。クイーニー（エイズリング・ロフトス）が夫のバーナード・ブライと、空いている部屋を貸すか貸さないかで口論している。ドイツ軍による空襲で焼け出された人よ、どうせ移民だろう。

クイーニーの回想。食肉用の豚の解体を営んでいるリンカンシャーの農場で生まれ育った彼女は、田舎生活をなんとか抜け出したい。クイーニーはベジタリアンだ——客席から笑い。と、チャンス到来、ロンドンのおばがお菓子屋の助手を求めている。花の都のにぎわいを上手にスクリーンに映す。彼女は服を買ってもらい、ロマンスにあこがれる。

11) 『ガーディアン』2019年5月2日付けの劇評より。

お婆の店に、丸メガネをかけた実直そうなバーナードがやって来る。『タイムズ』を買う。そんな高級紙を買うのは、本物の紳士だ。でも、彼はちんちんの銀行員、口下手、プロポーズされるが、彼女が思い描いているロマンスではない。人生はままならない。

だが、お婆さんがココナッツ飴を喉に詰まらせて急死し、田舎に帰りたくないクイーニーはバーナードと結婚する。堅物の夫とのナイトライフは、彼女が客席に向かって語り、観客の笑いを誘う。夫婦には子供ができない。

ロンドンは夜間の空襲に苦しむ。バーナードは空軍に入隊する。彼が家を出ていき、ドアが閉まる。するとドアの外に、3日間の仮の宿を求めて兵隊3人が姿を見せる。3人目の兵士は黒人、おゝ、マイケルではないか。マイケルとクイーニーが見つめ合って、握手する。甘いBGM、ロマンスの予感。

スッと転換すると、大柄な黒人ギルバート・ジョゼフ（ガーシュウィン・ユースタシュ・ジュニア）が白人の兵士と喧嘩している。彼はジャマイカで空軍¹²⁾に志願したところから回想を始める。父親はユダヤ教徒だったが、今は改宗した。イギリス人の審査官は、ならばヒトラーと戦う理由があるな、と。いここからは、白人の戦争より、ジャマイカの独立に命を捧げるとも言われたが、ギルバートは軍服姿の自分に満足していた。しかし、派遣されたのは戦場ではなく、リンカンシャーの輸送部隊、石炭運びだった。休みの日に、村人たちにじろじろと見られる。英語をしゃべっていると驚かれ、西インド諸島はアフリカかと聞かれる。映画館でアメリカ人と喧嘩になる。ナチスより白人の米兵の方が黒人に敵意をもっている。

戦争が終わる。だが、バーナードは除隊してもクイーニーのもとに帰ってこない。なんでもインドで軍事刑務所に2カ月入っていたとか。夫の留守宅にマイケルが訪ねてくる。クイーニーの体に電流が走る。一方、ジャマイカに帰国したギルバートは、町でホーテンスと出会う。お調子者の男と潔癖な女。相性は合わないかに見えた二人だが、ホーテンスは船賃を貸すから、代わりに結婚してくれ、と。ほんとにかよ、俺を見下しているようなのに、とギルバートは半信半疑。

二組の男女がオリヴィエ劇場の舞台に、十字に交差して立つ。戦後の混乱期、口では夢を語りながら、夢いっぱいの再出発ではない。いかにもイギリスの芝居だ。後方のスクリーンに大きく移民船が映る。船体にエンパイア・ウィンドラッシュ号と記されてい

12) マイケル、バーナード、ギルバートの3人とも志願したのが空軍（Royal Air Force, RAF）である。アメリカが参戦するまでの大戦初期にドイツ軍の猛攻に耐えたRAFの兵士たちは、戦中も戦後も英国民から英雄視された。

る。

イギリスは大战中、ファシズムと戦うために世界中の植民地から協力を仰いだ。それに報いるべく、また終戦後の労働力不足を補うために、広く大英帝国内の臣民たちを本国に迎え入れた。1948年、ジャマイカからの移民492名がテムズ川河口域のティルベリーに到着。その船の名にちなんで、戦後期のカリブ海系移民は「ウィンドラッシュ世代」と呼ばれている¹³⁾。

前半は主要人物たちの半生をタッタカタッタカ物語り、内容も“はじめチョロチョロ”の気分^{ゆる}でやや緩かった。しかし後半は、英国内の白人たちと有色人種たちの交流と葛藤を濃密に描いて“中パッパ”となる。

ギルバートがイギリスに渡ってから半年後、彼の後を追ってきた誇り高き新妻ホーテンスは驚く。一部屋だけの下宿、台所といえばコンロと流し台だけ、トイレは共有。いや、おまるもあるからと、ベッドの下からそれを取り出そうとして、夫は溜まっていたおしっこを飛ばしてしまう。これでもましな方さ、有色人種にはなかなか部屋を貸してくれないんだから。

大家は、おっ、クイーニーだ。彼女、お腹が大きい。亭主は行方不明なのに。

隣のおばさんがクイーニーに文句をつけに来る。お宅の下宿人、昨日もう一人女が増えたとか、国民保健サービス（NHS）がお目当てだろう、私たちの税金で病院が無料になったから、黒人に変な目で見られたくない、自分の国がまるで外国のようだ、と。

へへエ、白人の庶民感情をストレートに言わせている。イギリスはアメリカのおかげで戦勝国となったが、しかし町は焼け野原、食料は不足して配給制が長く続き——敗戦国日本と変わらない——、そこに肌の色の異なる移民たちが押し寄せてきた。

ギルバートの職場は郵便局。白人の労働者に黒ん坊^{グーキー}と呼ばれて、いびられる。「いつジャングルに帰るんだ？」と言われて我慢の限界、「あんたの女房と寝たらな」——場内から拍手と歓声。白人が先に手を出す、ギルバートの方が怒られる。「問題を起こすつもりはない。俺たちは一所懸命働いてる」、「イギリス人から仕事を奪うな」。双方の本音である。

ギルバートが帰宅すると、ホーテンスが床を拭いている。「立て」、妻にそんなことはさせたくない。ホーテンスは食事も作った。でも、チップスが^{なま}生、油で揚げるのを知ら

13) この舞台初演の前年、2018年にウィンドラッシュ世代が衆目を集める事件が起きた。カリブ海系の初期移民者たちは旅券やビザなしで入国し定住したが、不法移民を取り締まる改正移民法（2014年）により、彼らのうち数千人が公的書類の不備ゆえに滞在危機に陥るなど、不当な扱いを受けたとして社会問題化した。世に「ウィンドラッシュ事件」として知られている。

ない。夫は皿をひっくり返して、部屋を出ていく、妻は床に落ちたポテトをひとつひとつ拾う。客席がシヘンとなる。うまいなあ、笑わせたり、^{かたず}固唾を吞ませたり。ギルバートがフィッシュ&チップスを買って戻ってくる。新聞紙にくるんである。イギリス人は紙に載せたまま食べる。妻はそういうのは嫌だと言い、ギルバートが皿に盛り直す¹⁴⁾。

死んだと思っていたバーナードが帰ってくる。聞けば4カ月前に帰国していたとか。クイーニーが声を荒げる。それを聞いてギルバートが飛び込んでくる。今度はバーナードが憤る。黒人を下宿させているのか。

バーナードがギルバートに立ち退きを命じ、口論になる。「俺は^{リスペクタブル}まともな生活をするために戦ったんだ」、「俺だって同じ戦争を戦ったぞ、^{ディーセント}まともな生活のために¹⁵⁾」。その時、クイーニーの陣痛が始まる。男どもを部屋から追い出し、ホーテンスがお産を助ける。ここはコミカルに、笑えるように演出する。ホーテンスが妊婦のスカートの中を^{のぞ}覗く。生まれそうよ。だが、生まれた子は肌の色が黒かった。

マイケルが一人語りする間に、円形舞台が回転して、サッと場面が転換する。舞台中央に赤ん坊を抱いたクイーニーが立ち、「私たちの息子よ、マイケル」と。

クイーニーが長椅子で寝ている。赤ん坊が泣きだす。バーナードがあやす。この子の父親は空軍の兵士だった、一人で寂しかったのよ、インドで何があったの、カルカッタで暴動を鎮圧に行った、世話になった戦友が撃たれた、俺は恥ずべき行為をしてしまった……舌足らずな説明だが、バーナードが植民地の現地人を嫌悪する^{みなもと}気持ちの源は察せられる。

いくつも語られる^{しせい}市井の人々の素朴な本音のうちでも、観客の好感度は低いであろうバーナードのセリフは、いちばん率直かつ正直な発言かもしれない。彼は宗主国と植民地、白人と有色人種の間を象徴する重要な脇役といえようか。

クイーニーがホーテンスに子供を抱かせ、名はマイケルとつけたの、と。えっ、私の大事な人とこと同じ名前！ クイーニーがホーテンスに、この子を引き取ってほしいと頼む。私には育てる力がない、いずれ大きくなればいじめられる、施設に連れていっても、混血児はアメリカへ送られて、汚いもの扱いされる、ギルバート、あなたなら安心して託せる。

14) 念のためにフィッシュ&チップスに注を。イギリス人の、今風にいえば“ソウルフード”だ。バカでかい白身魚とどっさりのポテトの揚げ物。^{タイク・アウェイ}持ち帰りの場合は、新聞紙に包んでくれる。彼らはそれを手でつまんで食べる。ホーテンスはそういうお行儀の悪い英国風の食べ方を拒否したわけである。

15) respectable、decent、ともにイギリス人が愛することばだ。人から尊敬される、後ろ指を指されない、人間らしい、ちゃんとした、まともな。

とてもシリアスで情感にあふれるやりとり。だが、ギルバートがクイーニーをなだめようとする、バーナードが「俺の妻に汚い手で触れるな」。場に冷水を浴びせる一言。ギルバートがバーナードに語る——問題はその白い肌だ、それだけで黒人より上等な人間だと思ってしまう、俺たちは共によりよき世界のために戦ったのに、今もまだ戦闘をやめない、同じ人間じゃないか、お互いに家庭と仕事と自尊心と愛情をもっている、戦うのはもうやめよう。でも、ヘッヘッヘッ、バーナードは、「君の言っていることが理解できない」。またまた冷水。

いいねえ。好感度抜群のスターが正義を唱えるハリウッド映画より、僕はこういう異化された芝居の方が好きだ。そこに突出した主人公はいない。善玉と悪玉は分かれなない。どの登場人物にも一理ある。現実を映せば、そうなるはずだ。

ギルバートとホーテンスが自分たちの部屋に戻って話す。期待していた国とは全然違う、実は私も母親に捨てられたの、ただどいとこのマイケルは私を愛してくれたわ……さっきのあなた、威厳があった、「あなたのことを誇りに思ったわ」。ホーテンスが夫に心からのキスをする。「今夜は冷えそうね」——客席から笑い。「赤ん坊を引き取りましょう。」二人はこの夜、初めてベッドを共にしたことが暗示される。

舞台が回り、大勢のキャストが出てくる。クイーニーからホーテンスへ赤ん坊が手渡される。女から女へ、白人から黒人へ。それは予定調和のハッピーエンドではなく、むしろこれからの社会の始まりを象徴する。

白人たちと有色人種たちの邂逅^{かいこう}の物語である。移民を受け入れるとは、どういうことか。両者が同じ生活空間に共存すれば、当然こういうことが起きるよねという話。

それは「かくあるべし」と道徳を説くものではない¹⁶⁾。芝居は説教臭さが漂うと、とたんに興醒めになる。演劇は現実世界とそこに住む人々の本音をあぶり出す。移民たち

16) いたちの最後っ屁の注。僕は昔から、日本の「べき」社会が嫌いだ。教育現場も、かくあるべし、かくありたしが多すぎる。そんな絵に描いた餅のような道徳は、人間を上辺だけの善人にするのが関の山だ。

差別意識——それは万人が漏れなく有している意識である。だから、差別をなくせも、それを連呼してなくなるものではない。人間の、とくに自分の差別感の根源がどこにあるかを、時に沈思してみることが必要。よって、「差別語をなくせ」キャンペーンも、ただことばに封印をするだけで、人々が本音で差別をやめようという気になるはずがない。

日本のお家芸は、なんでもヤバイことはタブーにして、それで存在しないことにしてしまう技だ。しかし、本音で納得せずに、差別（語）をなくせを頭だけで理解している人ほど、いざ自分が移民と共生しなければならなくなれば、この芝居の白人たちと同じ思考方法を取り、同じ行動に出るかもしれない。べき論、スローガン化された道徳の不毛を思う。

日本というスモール・アイランドもまた、外国人労働者なくしては立ち行かない時代にすでに入っている。事は眼前の緊急課題である。

をめぐる人間ドラマは、差別撤廃のスローガンを連呼されるよりもずっと、彼らの抱える問題を、我々の自分事として考えるきっかけを与えてくれる。それが演劇の有する公共性というものであろう。

(2023年2月 脱稿)